

---

# 魔術学院の恋愛事情

香月航

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔術学院の恋愛事情

### 【Nコード】

N0530Z

### 【作者名】

香月航

### 【あらすじ】

とある魔術学院のとある平凡な私と、何故か非平凡な彼と恋をしたりしなかったりする…かもしれない話。

こちらは個人サイトで公開している作品の番外編になります。単体でもお楽しみ頂けるように書いて参りますが、詳しい世界観などは大元の作品をご確認下さいませ

## 00：ある放課後のこと（前書き）

個人サイト作品の1周年記念？で書いて参ります、息抜きSSSです。  
ゆるーっと適当にお砂糖話をお楽しみ頂ければ幸いです。

## 00:ある放課後のこと

オレンジ色の日差しが、見慣れた教室の天井を染め上げる。

昼と夜の間、世界の全てが赤になるこの時間は、とても美しいと思う。

そう、例えそれが“視界を埋める大半”の背景に過ぎないとしても。

「どこを見ている？」

背筋に響く低く甘い声色に、投げかけた思考が連れ戻される。

整った輪郭を滑り落ちるのは、まるで刃やこばのような輝く青銀。

对象的に、私の間抜け顔を映すキレ長の瞳は金色。

彩いろどられた内側には、すっと筋の通った鼻と抜群いんぐわいの位置で引き結んだ唇。

あれだ、よーするに、すっごい美形が

何故か私の超至近距離にいらっしやいます。

「……………」

両手首を捕まれ、背中は後ろの机に縫い付けられたように動かない。整ったお顔は吐息がかかるような距離で、今も刻一刻とその隙間を狭めつつある。

「…あの、先輩。聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「なんで私、名前も知らない先輩に押し倒されているんでしょう？」

## 01：別世界で生きててくれよ

『魔術』と呼ばれる魔道技術を至上とする王国・ロスヴィータ。

この国において、唯一の国立の学び舎であり、その道の最高峰の名門校がある。

才能のある者ならば出自を問わず、15歳から入学が可能。

全寮制で、在学期間はどの私立学校よりも長い6年間。

それがここ、『ロスヴィータ王立魔術学院』

運よく才能を持って生まれた私、メリル・フォースターは、運よくこの名門校に入学でき、今年で二年目になる。

魔術師として特筆するような部分はないものの、クラスの友達とも寮の相方とも問題なく、日々平穩に暮らしている。

……暮らしていたのだ。

そう、平凡で何もない毎日を楽しく生きていたのだ。

(…はい現実逃避終了)

目を開けば、相変わらず夕日に染まった教室の一角。

至近距離には美形の先輩がいらっしやる。

一体何がどうしてこうなってしまったのか。

とりあえず、私が投げかけた『知らない』と言う事実には、先輩は整った形の眉をひそめている。

気分を害したとしても仕方ない。知らないものは知らないのだから。

「…俺は六年のギルベルト・クラルヴァインだ。それなりに有名なつもりだったが、こんなものか」

「ああ、クラルヴァイン先輩。名前だけ聞いたことあります、少し」  
「そ、そうか」

眉間の皺を一本増やして、深く息をはく。

先輩、この距離のため息つかれるとすぐくすぐったいですマジやめて。

ともあれ、最上たる六年のクラルヴァイン先輩と言えば、確かに下級生でも聞く名前だ。

クラルヴァイン家は確か、子爵位を賜る貴族でありながら、魔術の名門としてもその名を連ねている。

加えて先輩本人のこの整いまくった容姿とくれば、有名じゃない方がおかしいだろう。

…私のように、なーんの興味も関係もない庶民がいるのも事実だけだ。

「それで、名門家の先輩が一平民の私に何の用でしょう？」

自分で言うのも何だが、私は本ツ当に平凡だ。

普通の家庭で生まれ、普通の娘として育てられ、学院に入れたものの成績は真ん中やや下め。

容姿も先輩とは違い、礼賛の言葉には縁遠い。あと貧乳。

7

どう考えても先輩とは住む世界が違う。

こんな事態になっていることが、まず何かの間違いとしか思えないか？」

「寝技の練習ですか？」

「斬新な返しだな」

「あとはすっごい目が悪くて、誰かと間違えたとか？」

「あいにくと、視力が下がった覚えはないな。メリル・フォースタ

「

…残念ながら、呼ばれているのは私の名前だ。  
同姓同名の美少女がいると言う噂も聞いたことはない。

「名前でも構わないか？」

「…っ！」

左手の拘束が解かれて、離れた流れのままに指先が頬にふれる。

「くすぐつたいです」

「じきに慣れる」

ゆっくりと輪郭を滑りおりて、顎の辺りで一度止まる。

軽く上を向かされれば、もう影の重なるような位置にご尊顔がある。

「……………」

「……………」

視界を埋める男性の姿は、びっくりするほどきれいだ。  
赤い日差しが濃い影を落として、より一層整った輪郭を際立たせる。  
このまま絵画として切り抜いて飾ってしまえるぐらいに。

……けど、なぜかときめきは沸いてこない。

(……瞳に、熱がない)

この上なく近くににいるのに、『観察されている』とでも言うのだろうか。

ますます美しい色を魅せる金眼は、何の感情も映さずはこちらを見ている。

「…珍しい反応をするな」

「そうですね?」

「俺がこの距離までせまって、無表情を通す女は初めてだ」

「貴方こそ、色事を構えるような表情ではありませんよ」

瞬間、初めて先輩の顔に表情らしい表情が浮かんだ。

きよとん、と。音がしそうなぐらいの、ちょっと間の抜けた驚きが。

「…そんなこと、初めて言われたな」

「いつもあの無表情顔で女性にせまっていたんですか。割とひどいですね」

「そんなに酷い顔をしていたのか」

すっと、予想よりもアツサリ拘束が外れる。

大きな影がどいて、開けた視界に鮮やかな夕日が見えた。いつの間にか紫が混じり始めたそれは、もう間もなく暮れてしまうだろう。

予想以上に時間が経っていたみたいだ。そろそろ学院を出ないといけないのだけど…

「あの、先輩？」

人の世界を遮断していた男は、何やら少し落ち込んでいる様子だ。…立ってみると、私よりも頭ひとつ以上背が高い。腰から下の長さは、もはや嫌味の領域だわ。

「先輩、用事がないのなら私は帰ってもよろしいですか？」

だから、口調に少々トゲがはえてしまうのも、ご容赦頂きたい。  
家柄がよくて顔がよくて、おまけにスタイルも抜群とか。どこまで  
天にえこひいきされているのだから。

「ああ、悪い。用件を伝えていなかったな」

「…出来れば口頭で伝えて頂きたかったですよ」

しかも、先ほどまで初見の女を押し倒していたと言っのに。  
いとも平然と。全く、何事もなかったかのように立っているのが、  
また腹立たしい。

「…私はこの17年の生の中で、あんなことをされたのは初めてだ  
ったのに。」

「それで、何のご用事だったんですか？」

色んなことが重なって、胸がムカムカしていた。  
私はとにかく早く帰りたいかった。  
住む世界が違いすぎる彼と、これ以上同じ部屋にいたくなかった。

「…今になって思う。」

あの時、用件を聞かずにそのまま逃げてしまっていたら、結末は変

わっていたのだろうか。

「では、単刀直入に。  
メリル・フォースター、俺の子供を生んでくれ」

「……………は？」

## 02：何も聞かなかったことにしようか

聞こえなかったか？とあくまで無表情に問いかける彼に、力の限り言い返したい。

聞こえなかったことにしていいですか？

否、聞かなかったことにして今から逃走してもいいだろうか。

ドン引きだ。

いきなり何を言い出すかと思えば、冗談にしても性質たちが悪い、悪すぎる。

「メリル・フォースター、返事を…」

「頭おかしいんじゃないですか？」

結局、口について出たのは、一番言ったらヤバそうな返答だった。

(私のばか……！……！)

素直に言い過ぎた！と慌てて口をふさぐも、時すでに遅し。

頭おかしいはマズイだろう！ 思っても言ったらいけない！

（お、怒られる…殴られるかも！？）

何せ相手は上級生、それも最上学年。おまけに貴族様である。どうしよう、ここはひとつ土下座でもするべきか！？

「……………あ、あの、先輩？」

恐る恐る顔を見上げる。罵声はまだふつてこないようだけど…

「ん、なんだ？」

「あ、れ？ 怒らないんですか？」

意外なことに、対した先輩は平然とした様子で立ったままだった。静かに怒っている、と言う雰囲気でもない。

「怒る要素がないだろう。的確な反応だったから、むしろ感心していた」

（的確って…）

自分で言っというて『頭おかしい』と思っていたのか。この人、きりつとした外見の割りに、中身は結構天然なのかもしれない。

「一応弁明をしておきたいのだが、構わないか？」

「え、あ…手短に済むのなら」

視線を動かせば、窓の外はそろそろ赤よりも黒の方が多くなっている。

学院の完全施設まで、その時間は残ってないはずだ。

善処すると頷いて、手近な机に座った彼はつまらなそうな無表情のまま話し始めた。

「占術師はわかるか？」

「せんじゅつ…占いの魔術を本職にしている方ですね」

二年の私は分野としてしか習っていないが、魔術の中でも特殊なひとつだ。

予知、先見、未来視。呼び名はさまざまだが、明日の天気から男女の相性・結ばれた先まで、とにかく先を読むことに長けた魔術師を『占術師』と呼ぶ。

「貴族にはだいたい抱えの占術師がいるのだが、先日帰省した際、  
当家のそれに興味深いことを言われてな」

金眼が私をとらえる。  
射抜くような強い視線に、一瞬だけどきっとした。

「メリル・フォスター、お前は非常に珍しい体質の持ち主だそう  
だ。

お前と交わることで、俺は潜在能力をあますことなく発揮出来るら  
しい」

「……………」

まじわる？

「また、俺達の間にもつけられる子は、類たくいまれな資質を持って生  
まれてくるそつだ」

「ごどもって…ちょ、ちょっと待って下さい！」

「質問があるなら遠慮するな」

「質問じゃなくて！」

まじわる、で次に出た単語が子供だった。

男女が『交わる』と言うことは、もしかしなくてもつまり……

「あの、もしかして、私を性的な意味で抱くとかそういう話をしてらっしゃいます?」

「ああ、そうだが」

ぎゃーーーーーー!!!!!!

顔に血がのぼってくる。この男、さっきからサラッとなんてことを言っていたんだ。

弁明も何もないじゃない、まんまですよ！ 抱かせろって言ったよー!!

「…なんだ。俺が相手ではそんなに不服か?」

「初対面で不服も何ありません!! 第一、何の弁明にもなってませんよ!」

前言はやっぱり撤回しない。この人頭おかしい!

もし彼が普通だと言うのなら、私はこの国の『貴族』を絶対信じないことにしよう。

始終無表情で子供生めとか言ってくる男が、普通だなんて認めてなるものか!

「だから言っているだろう。交わりに意味があるのだと」

「意味があるうとなかろうと、普通の人間はいきなり抱かせるなんて言いません! そそもいきなり押し倒したりしません!」

そつだ、いきなり押し倒してきたんだ、この人。  
意味がそのままだと言うことは、私が抵抗しなかつたら学院でコト  
に及ぶつもりだったのか！？  
それも初対面の人間と！？

「……変態、強姦魔。学院で変なことしようとか、最低です」

「まだ何もしていないのだから、それはさすがに撤回しろ。雰囲気  
を作つたら移動するつもりだった」

説明を後に回して？ その時点で最低じゃない。

それとも、美形様に押し倒されればどんな女も落ちるってか？

…いや、ありえるわね。この男、外見だけは群を抜いているし。  
多少怪訝けげんな様子はあれど、悪いことをしたとは思っていないようだ  
し…そういつことなのだろう。

(確信した。彼はまさに、別の世界の人間だ)

深く深くため息をついて……今度は私が見据える。  
ここまで聞いたらもう十分だろう。

「私はもう貴方と話したくありません。失礼させて頂きます！」

「おい待て、メリル・フォースターツ!?」

誰が待つかが冗談じゃない。

こんな頭の痛くなるような話にこれ以上付き合ってられるものか！  
あげく貞操の危機とか本当に有り得ない。

背後から先輩の呼び声が聞こえていたけど、絶対に振り返らないで  
走り出す。

持てる力の限りに足を前へ、一歩でも前へ。あの教室から遠くへ。

窓の外はすっかり暗くなっている。

今の時間なら先生達が戸締り確認に巡回しているはずだ。  
もし捕まったとしても、助けてくれる要素はある。

(なんで私がこんな目にあわなきゃならないのよ…っ!!)

世の不条理さに涙が出そうになりながら、階段を駆け下りて、女子  
寮への帰路を急ぐ。

(悪い夢でありますように！ 明日は何事もなく平凡でありますよ  
うに!!)

信じたこともないカミサマに祈りながら、汗ばんだ手で扉をこじ開  
け、そのまま力いっぱい閉める。

「よし、逃げ切ったあッ！」

へなへなと座り込んだ私を女子院生達が注目していたが、構ってられる体力はもうなかった。

疲れた。本当に疲れた。一体なんだったんだもっ……

とにかく、今日は早く寝よう。すぐにも寝よう。

今日という日をなかったことにするんだ、うん。

…けれど、私は忘れていたのだ。

祈った先のカミサマとやらは、あの変態男をえこひいきしまくっているような存在だと言うことを。

### 03・せめて夜は静かに（前書き）

本文中に元作品「Magical Party!!」の人物名が登場しています。

彼らの詳細は、プロフィール掲載の個人サイトでご確認下さいませ。

### 03：せめて夜は静かに

「うわーそりやまた…えらい面倒ごとに巻き込まれたわね」

「でしょ？ 意味わからないわよもっ」

亜麻色のふわふわした髪をまとめながら、私の相方の少女・モニカが苦い笑いをこぼす。

この学院は全寮制であり、かつ全ての部屋が二人部屋になっている。とは言え、二人で使うには勿体ないほどの広さがあるし、ベッドにはそれぞれ簡易ながら天蓋てんがいがついている豪華仕様だ。施設のすばらしさは、まさに国立名門様々である。

在学期間が長いこともあって、寮では一年ごとに相方変更を申請できるのだけど、彼女とは去年から一緒だ。個人的には、卒業まで一緒でも構わないぐらい、私の理解者だと思っっている。

「貴族様のお戯たわむれならいいんだけどね…」

寝転がる私の頭を、ふっくらとした手が撫でてくれる。

あーホントに、彼女が相方で良かった。平凡ながら、私はつくづく友人関係に恵まれている。

「慰めてあげたいけどね。クラブヴァイン家って言うのが、冗談の線薄いかも」

「なに？ 問題のある家なの？」

「問題っていうかね…」

言い淀みつつも心当たりがあるのだろう。

モニカは我関せずの私と違い、学年内でもかなりの情報通だ。

私ができ上がって姿勢を正すと、大きめ眼鏡をくいつと持ち上げて彼女も真面目な表情になった。

「貴族としては問題ないわ。むしろ安定してるから、玉の輿狙いならオススメ」

「別に狙ってない」

「欲がないわね。まあそっちは問題ないんだけど、魔術師としてはね…最近ふるってなかったみたいだから」

「…そうなの？」

魔術師と言うのは、まず生まれ持った才能がものを言う。

先天性のソレがなかった場合は、どんなに努力しても魔術を扱うことは出来ないのだ。

しかも、遺伝する条件が極めて曖昧で、名門血筋でも受け継がないこともあるし、無関係の平民からポツと生まれることもある。

もちろん、“名門”と呼ばれる家はその対策もしているのだろうけど…

「衰退つて言うほどではないけどね。あそこは、子爵と魔術名門の二枚看板でやってきてる家だから。片方でも傾くと結構痛手になるのよね」

「ああ、確かに」

どちらか一つでも十分凄いことだが、ここまで両方を掲げてしまった以上、後には引けないのはなんとなくわかる。  
有名な家は有名な家で、色々大変そうだ。…私には関係ないけれど。

「ギルベルト先輩…いえ、“次の当主”は当たり前株っぽいからね。期待も義務も大きいんじゃないかしら」

「あの变た…ごめん。あの人、優秀なの？」

「あのクラスでなければ”首席も狙えたぐらいの実力者よ”

「……………ああ」

モニカが強調した言葉に、今度こそ少し同情してしまった。  
と言うのも、今の六年生…先輩が在籍しているクラスは、長い学院の歴史から見ても異常なのだ。

まず『二大名門家』の人間がいる時点で積んでいる。クラルヴァイン家も名門だけど、全然レベルが違う。

国の双璧、魔術師の頂点と呼ばれる最高峰のひとつ『キルハインツ本家』

現在の首席は、その次期当主様なのである。

学年をいくつも飛び級した上で首席だそうで、劣等寄りの私には想像もつかない世界だ。

で、次席の生徒もそれに劣っていない。キルハインツ氏が飛び級して来るまでは、ぶつちぎりの成績だったそうだ。

名門出ではないけれど、すでに王城からお誘いが来ているぐらいの実力者。

名前はキンバリー先輩。周囲に無関心の私でも知っているぐらい有名な人達だ。

「あの二人がいたら、少なくとも一位・二位は狙えないわね…」

「その二人は当然凄いけど、女子にも凄いものいるからね、あのクラス」

「なにそれ？」

「公式成績がないって言うか…隠してるのかもしれないんだけどさ。先月と、つい数日前にあのクラスに転入生が来ててね。二人ともキ

ルハインツ格のトンデモ魔術師らしいよ」

なんだそれは。

あのクラスは魔王城か何かか！？

「化け物の巣窟ネストじゃない…」

「ああ、そんな感じよね」

先輩を化け物呼ばわりするのはどうかと思うけど、見習いにもなれていない私達にはそんな感想しか抱けない。

そりゃあ、多少優秀な程度では埋もれてしまうだろう。

名門の家名を背負ってる者としては、楽しい状況ではないはずだ。

「だからって、知りもしない先輩のために処女捧げられるほど、私は博愛主義者じゃないわよ」

「家も顔のレベルも問題ないんだから、それなりに有りだとは思っけどね」

「じゃあモニカ変わってよ。夢見がちでもなんでも、私は愛情がないと無理」

よく知りもしない先輩の家のために、処女捧げて子供生むなんて絶対に嫌だ。

しかも、顔は良くても無表情の常識破り…変態の相手なんてごめんこうむる！

「諦めてくれるといいわね」

「本当にね……」

ため息だらけの空気に包まれながら、結局だらだら雑談をしてから眠った。

いつもの日常を堪能してから眠れば、今日の出来事はただの珍事件として全部忘れてしまえると思った。

けれど翌日、私の期待は真逆に裏切られることになる。

「ねえねえ、女子寮の前にすごいカツコイイ人いるんだけど」

「あれ、六年のギルベルト先輩じゃん！ 誰よ待たせてるの！」

「……………」

「…どうするのよ、待たせてる人」

朝一番、日差しの中でキラキラと輝くイケメンの登場に、浮き足たつ年頃の女子院生達。

その後ろで、お通夜のような空気の私達。

何がどうして貴方そこにいるのさ。

「メリル、どーすんの？」

「人違いでしょ？」

そうだと願うしかない。

ほら、イケメン待たせてる美少女さん、早く行ってあげてくれよ！

…けれど、待てども待てども美少女は合流せず。

寮から出てくる女子達を、無表情のまま眺めては首をかしげるばかりだ。

時折、好奇心に負けた院生が話しかけているが、異様なまでにそっけなくあしらっている。

「人違いだと思いたいけど、あたしは業者用出入口を薦めるわね」

モニカの提案に深く頷いて、黄色い声をあげる院生達とは逆方向へ歩き出す。

小さくふられた手が、まるで戦地へ赴くような気分になさせてくれた。

奇跡みたいな幸運で入学できた魔術学院、卒業までは私なりに精一杯頑張ろうと決めていた。

けれどこの日、初めて私の頭の中に無断欠席モーサボろうかなと言っ言葉が何度も浮かんでいった。

## 04：楽しいお昼ご飯

一日が始まって数時間。

午前の授業を終えて、お昼休憩を告げる鐘が鳴り響く頃。

「メリル・フォースターはいるか？」

食堂へ急ぐ少年・少女達を遮ったのは、日常にはあまりにも不似合いな美形の先輩様だった。

途端に慌て始める教室と、集中する視線。

四十人程度のクラスで名指しとなれば、当然逃げられるという選択肢などなかった。

「これはクラルヴァイン先輩、貴族のご子息がド庶民の私に何かご用でしょうか？」

好奇の視線を意地で無視しつつ、顔に浮かべるのは満面の笑み。もちろん、好意などではない。全力で嫌味だ。

「…何を怒っているんだ？」

「怒るなんてとんでもない。私のような下賤げせんの者が先輩とお話しをするなんて恐れ多くて…一刻も早くこの場を去りたいだけです」

「そうか、気が利かなかつたな。どこか一人きりになれる場所へ…」

「貴方と話したくないと言っているんです」

が、どうやらこの変態には嫌味や皮肉は通じないようだ。

いとも平然と返された言葉に、貼り付けていた笑顔は一瞬で崩れてしまった。

全く、天然とは鬱陶しいことこの上ない。

「ご用がなければクラスにお戻り下さいませ。でなければ、今すぐに私が去ります」

「用ならある。頼む、話を聞いてくれ」

「昨日の話ならお断……ちょ、ちょっと!?!」

遮ろうとした瞬間に、彼はさらに想定外の行動をとった。

頭を下げた。貴族の彼が、庶民で下級生の私に対して。

それも、まっすぐ向かい合って深々と。正式な礼の形でだ。

「せ、先輩！ やめて、早く頭上げて下さい！」

ただでさえ視線を集めていたと言うのに、まさかの状況。小声がざわめきに変わるのには何秒もかからなかった。

冗談じゃない、これじゃ私が何かしているようじゃないか！ 私は巻き込まれただけで、一切合切関係ないのに！

「聞きます、話聞きますから！ やめて下さいってば！」

「感謝する」

正した姿勢のままに顔をあげて、薄い唇がゆるやかな弧を描く。

ハメられたかと思いきや、どうにもやはり素のようだ。

たじろぐ私を前にして、頭上に疑問符が浮かんで見える。

冷静で鋭い印象の容姿とは真逆の反応ばかり…ああ、やり辛い頭が痛い。

「ではそうだな、どこか二人きりになれる場所に」

「食堂でいいですよね！ これからちょうどお昼ですし！」

この流れできて『二人きりになれる場所』だ。しかも平然と。もう本当にやめて欲しい。

私達は何の関係でもないのに、何故いちいちそう扱う必要があるのか。

二人きりなんて絶対無理だ。また押し倒されでもしたら、今度は我慢できる気がしない。

たとえ変態でも相手は先輩で貴族様。これ以上関わりを持つのは、どんな意味でもごめんだわ。

「じゃあ行きましょう。さっさと行って、さっさと終わらせましょう！」

と言うことで、先輩の返事を待たずに食堂への慣れた道を歩き出す。ちらっと見やった教室では、モニ力がまた兵士を送り出すような表情で手をふっていた。

\* \* \*

学院の食堂は、その名がつく他の場所に謝りたいぐらい豪華なところである。

高級宿を彷彿とさせる高い高い天井とシャンデリア型の灯り。

机も椅子も質の良い木を使っており、形こそシンプルだけど使い心地は抜群。

広く取られた窓からは穏やかな日が差し込み、要所要所には植物が飾られている。

どこを見ても清潔な、落ち着いた空間。

入学したての頃は、食事の度に感嘆のため息をついていたものだ。

この整った環境で、出される食事も大変美味。

メニューも多いし、一番高いものでも五百銀貨1枚程度） ほぼ500円ぐらい）と言う良心的過ぎる価格。

学院に来て本当良かったと思うことのひとつは、この食事環境のす

ばらしさだ。

卒業したくないと言う院生がいるのもよくわかる。

「それでメリル、注文は？」

「自分で買いますからお先にどうぞ」

これで隣りにいるのが変態男でなければ、今日も食事を存分に楽しめたのだけど…今日は違う意味のため息ばかりこぼれる。

まあ、外見だけならご馳走様と言いたいぐらいだけど。

注文待ちをしている間にも、熱い視線を投げかけてくる女子があちこちにいらっしやる。

美形は美形で、庶民にはわからない苦勞をしているのかもしれない。

「会計を一緒に済ませた方が楽だ」

「すみません、この人とは別にお願ひします」

とは言え、私には関係のない話だ。

露骨に無視したところ、少しだけ眉が下がった気がした。

モテ男には拒絶の言葉など縁のないものなんだろう。ざまーみる。

「…食事ぐらいは奢らせる。男の矜持きょうじに関わる」

「そーゆーのは他の女性にどうぞ。貴方に借りを作りたくありませんので」

ますます眉が下がった気がする。

外見に似合わずフェミニストと言うことだろうか。まあ貴族だしね。昨日の発言を聞いている身としては、女扱いされるのがもう嫌なんだけど。

「……って、ちょっと先輩!？」

などと、ほんの数秒悪態をついていた隙に、私の注文したお盆が手の中から消えていた。勝手に移動するなんてこともなく、当然犯人は隣りにいた変態先輩だ。

ちようど私の頭の上あたりまで持ち上げて、すたすたと歩いて行ってしまう。つか足長ツ歩幅広ツ!!

「返して下さい私のお昼ご飯!!」

「席についたら返す。ほら、行くぞ」

無表情ながら、そこはかたなく漂うしてやったり感。

慌てて追いかけるも、圧倒的な歩幅差にどうしても追いつけない。

「返して下さい!!」

結局彼が見つけた日当たりの良い角の席に落ち着くまで、私達は視線を集めながら不毛な追いかっこをする羽目になった。

あと、いつの間にか制服のポケットにお昼ご飯代が仕込まれていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0530z/>

---

魔術学院の恋愛事情

2011年12月10日01時45分発行